

基本語彙の対照研究 : 量的な対照をめぐって

著者	高田 誠
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	19
ページ	1-13
発行年	1991-03-01
その他のタイトル	Grundwortschatze im Kontrast : eine Überlegung der quantitativen Kontrastierung
URL	http://hdl.handle.net/2241/13572

基本語彙の対照研究

——量的な対照をめぐる——

高 田 誠

1. 語彙の対照

語彙についての共時的な記述研究としては、語彙全体を視野にいて扱おうとする語彙論的研究と、個々の語あるいはいくつかの語のあつまりの意味記述を中心においた意味論的研究との二つの方向が考えられよう。ある一つの言語についての語彙論的研究を考えれば、語構成や品詞論などの形態論構文論にかかわる議論があり、また、たとえば日本語についていえば、和語、漢語、外来語の別といった語種の分布などが問題とされる。これらの研究は、何万、何十万という数の語彙項目をあつかうことになり、それらの項目の頻度や分布などの量的なふるまいに注目した方法論がとられることが少なくない。

一方、個々の語の意味論的な記述記述究では、問題が個別的であり、量的なあつかいをするというよりは、意味論に重きをおいた研究に傾くことになる。意味論的な研究は、さらに、同義語、類義語、反意語などの観点から語を類別分類して、だんだんに大きなグループにまとめ、ついにはその言語全体の意味の体系、あるいは、概念の体系を描き出すシソーラスの構築へと発展していく。

それぞれの研究は、その言語の語彙あるいは個々の語についてさまざまなことを語ってくれるが、個々の語あるいは語彙項目を無限の連続体である森羅万象が分節、抽象され非連続な単位へと切り分けられたときの一つひとつの項目とかがえると、森羅万象のそれぞれの下位区分にどのような語彙項目が分布するかをみることは、その言語がこの世をどのように分節してとらえているのか、森羅万象をどのようにみているのかという視点から興味のもたれる観点である。

二つ以上の異なった言語の語彙にかかわる対照的研究においても、基本的には一つの言語における研究の場合と同じ視点からさまざまな分析が考えられる

が、とりわけ、それぞれの言語のあいだの意味的な広がりくらべてみることに大きな興味がもたれる。すなわち、人は言語をとおして世界をみている、とりわけ、語をもって森羅万象を分節して認識しているとしたとき、それぞれの言語の語彙の織りなす意味的な分布をみることは、それぞれの言語が森羅万象をどのように分節しているか、さらには、その言語の話し手たちがまわりの世界をどのように認識しているかをみることであり、いうなれば、それぞれの言語の話し手たちの世界観、あるいは、Weltanschauung の違いをみるということである。

その方法として第一に考えられるものは、個々の語ないしそれぞれの意味分野ごとの小さな語グループの意味論的な分析である。この方法については、石綿・高田（1990）のなかでもそのあらましを述べた。参照されたい。そこでもふれたように、対照研究の一分野として意識された対照意味論的分析は比較的新しく行われはじめたものとしても、分化されない連続体としての現実世界を言語でもって分節し境界を設けていくとき、その境界の位置は言語によってそれぞれ異なるというみかたは、それ以前から提示されていたものである。具体的な例をもってこのことに言及した言語学者としては、たとえば、イェルムスレウをあげるべきであろう。“prolegomena”として広く知られている著作を、最近出版された非常によくできた翻訳書イェルムスレウ（1985）にしたがってみると、たとえば、

「……一つの言語の範列と、もう一つの言語のこれに対する範列とは、まったく同一の原意区域をおおっていて、この区域をこれらの言語から引き離してみると、それは分割されていない無定形の継続体であって、そこには言語の持つ形成作用によってはじめて境界が設けられると言うことができる。」
(64ページ)

として、それぞれの言語が連続する現実世界を分割し、それに境界を与えているのだということを主張し、続いて、色彩スペクトルを分割するデンマーク語とウェイルズ語の例をひいて、「それぞれの言語が恣意的に、独自の境界を設けている」ようすを示している。結果の図式のみ引用すると、つぎのようである。

grøn 緑色	gwyrd
blaa 青色	glas
graa 灰色	
brun 茶色	llwyd

[デンマーク語] [ウェイルズ語]

さらに、いくつかの例を示しつつ、「まったく同一の原意区域の中にみられるこのような不一致は、いたるところに繰り返して見出される……」として、次のような図を示している。(同65, 66ページ)

træ 木, 木材	Baum 木	arbre 木
	Holz 木材	bois 木材, 森
skov 森	Wald 森	forêt 森

[デンマーク語] [ドイツ語] [フランス語]

よく知られたこれらの例は、言語記号の特質を論ずるためのものであり、とくに対照的な観点をとりあげるためのものというわけではないが、言語によって世界の切りかたが異なるということを明示的に論じたものとして、対照研究の立場からも注目すべき視点である。

このようにして、いくつかの語が集まってかたちづくる語彙の下位区分について、一つ一つ分析を重ねることによって、それぞれの意味分野におけるそれぞれの語の意味の広がりや言語ごとの違いが明らかになり、ついには、それぞれの言語のもつ世界観の違いを明示的に示すことができるとかんがえられる。

2. 基本語彙の対照

一方、このような個々の語ないしは小さな意味分野にかかわるいくつかの語のグループについての詳細な分析でえられる個別的問題は別として、語彙全体について、それぞれの意味分野ごとの語彙項目の分布を量的に調べ、それぞれの言語が、それぞれの意味の下位区分ごとにどれだけの量の語彙項目を配しているかをみようとする観点がある。ある一つの意味分野に一方の言語が他方より外くの語彙項目を配していることが、その言語がその分野の現象にたいして他より強い関心をもっていることを示すかどうかは簡単にはいえないにしても、それぞれの言語のあいだで違いがあること、あるいは、違わないことが、量的な指数をもって示すことができれば、価値のある結果ということができる。

語彙全体でみたときは、言語によるそれぞれの語彙項目の分布の濃淡がその分野にたいするその言語の関心の度合を示しているかどうかをいうことには問題があるとしても、たとえば基本語彙のような、ある一定の基準で選ばれた限られた量の語彙のあいだでの分布であれば、それぞれの言語がその限定された語彙のなかにどのような語彙項目を配しているかということを見ることは、その言語のある一定の条件のもとでの「世界観」を知ることになると考えることができる。

基本語彙というものをどのように考えるかはここでは論じない。また、基本語彙と基礎語彙との違いについても措くことにして、たとえば、単純に出現頻度によって上位から3000語なり5000語なりをとったとして、そこに含まれる語彙項目の意味分野ごとの分布がえられれば、それぞれの言語ごとに、どの意味分野の語を多く用いているかが分かるわけであり、その言語の話し手たちが森羅万象のうちにどのような部分についてより多くの言語活動をしているかを垣間みることになるわけである。

また、たとえば、その言語を外国語として学習しようとする人々のためのいわゆる「外国人のための学習基本語彙」のように、語彙集をつくる側により一定の意図をもって語彙項目が選定されることによって、ある一定量の基本語彙が設定される場合がある。どのように選定するかは、場合によってさまざまであろうが、多くの場合、選定にあたるものの主観的判断が働いているようである。すなわち、選定者のもつ語彙の全体系のなか、いうならば、ソシュールのいう「語が描く星座」のなかから、その言語でもって言語活動を行なう場合重

要であると考えられる語彙項目が選ばれるわけで、選ばれた項目のそれぞれの意味分野での分布をみれば、この世界のさまざまなものごとのうち、その言語あるいはその言語の話し手にとっては、どの意味分野が重要なのか、どのような部分に多く目がいっているかが見えてくるということになる。

そして、そのような基本語彙を言語ごとに対照してみれば、それぞれの意味分野について言語による重要さの違い関心の度合の違いが見えてくると考えられるわけである。このような見通しと意図とでもっていくつかの言語の基本語彙を対照的に配列して作成した語彙表が次節に述べる国立国語研究所（1986）であり、それをもとにして、意味分野ごとの分布の違いをみようとするのが本稿の目的である。

3. 国立国語研究所（1986）

『日独仏西基本語彙対照表』⁽¹⁾と称するこの対照語彙表は、その作成の意図を、

「この研究の目的は、日本語といくつかの外国語でいわゆる学習基本語彙とされているものについて、意味分類体で一つの表の上に配列し、各基本語彙がそれぞれの意味分野によってどのような分布を示すか、あるいは、分布の違いを見せるかということを鳥瞰しようというところにある。」

（vi ページ）

として作成されたもので、日本語と対比する相手方の言語として、ドイツ語、フランス語、スペイン語がとりあげられている。

日本語については、国立国語研究所作成の『日本語教育のための基本語彙調査』（国立国語研究所（1984））で設定された基本語彙約6000語がもちいられ、独、仏、西については、いずれも「白水社」刊行の基本語辞典がもちいられている。それぞれ約5000語を項目としてかかげているものである。（vii ページ参照）それぞれの言語の「基本語集」についてさまざまな意味で等質なものをえることは、不可能とはいえないとしても実際問題としてはむずかしい。基本語彙選定のプロセスや語彙表編集の過程でそれぞれの作成者の意図や方法がかならずしも同じではないからである。したがって、とにかくやってみるということから、おおよそ類似の語彙表でもって比較をしてみるということにならざる

をえなかったことにはいたしかたない部分がある。

この語彙表の作成手順等の詳細については同書の解説を参照されたいが、そのあらましを述べれば以下のようなものである。

- ① 独、仏、西の各語彙項目についての日本語の語釈を手がかりにして、それぞれの項目を該当する意味分野に分配する。たとえば、あるスペイン語の単語につづの日本語訳がつけられていれば、その3つ日本語の意味にしたがって3つの場所へ配られる。すなわち、その単語は意味体系全体をおおう語彙項目として3回働いたことになり、日本語とスペイン語との意味の上で相対応する組が3つえられることになる。同様の作業を3言語のすべての語彙項目についておこなうと、ついには、それぞれの日本語の項目とそれに対応した独語、仏語、西語との組合わさった対応セットがえられる。
- ② これら一つ一つのセットを分類配分するための共通の意味体系、いわば、意味のメタシステムとして、『分類語彙表』（国立国語研究所（1964））の意味分類体系を用いる。すなわち、それぞれのセットの日本語部分にしたがっておのおのを『分類語彙表』の意味分類番号のところに配する。
- ③ これらの日本語部分と上述の国立国語研究所（1984）で設定された日本語の基本語彙項目とを対比する。結果としては、独、仏、西の各言語で基本語彙としてとりあげられたものに対応する日本語の項目が、日本語でも同じように基本語彙にあたっているかどうかを示されている。
- ④ 語釈として示された日本語の部分は、語彙項目の単位としてはその長さも形態的性質もさまざまであり、いわゆる β 単位でとらえられている日本語の項目とは必ずしも一致しない場合がある。その場合には、意味の中心をなす部分に注目して日本語の項目と対応させた。

4. 意味分野ごとの分布密度

このようにして、4言語の基本語彙が『分類語彙表』の意味分類体系にしたがってどのように配置されているかが一覧できるかたちの対照語彙表がえられたわけであるが、それぞれの言語の語彙集の編集の仕方の違いもあり、ここに登録された語彙項目の延べの数にはかなりの差がみられる。それぞれの項目に与えた語釈の項目数にかなりの違いがみられるのがその要因である。つまり、一つの語形があちこちの意味分野に現われる回数が言語によってかなり違うと

いうことである。いいかえれば、ここに配分された一つひとつの項目のもつ全体に対する重さ、あるいは、それぞれの意味分野を占める働きの度合がそれぞれ異なっているということである。したがって、それぞれの意味分野がどれだけの語彙項目でおおわれているかを各言語間でみるためには、項目の数ではなくて、それぞれの言語の語彙項目の延べ語数にたいする各意味分野に配された項目数の割合で考えなければならないということになる。

このようなことを根拠としてそれぞれの意味分野ごとの分布を、日本語、ドイツ語、フランス語、スペイン語のおのおのについて示したのが、以下に掲げる表である。

『日独仏西基本語彙対照表』では、意味の分類体系は『分類語彙表』の体系をそのままもちいた。すなわち、第1段階の大分類で「体」「用」「相」「その他」の四つに分類し、以下、大きな意味分野からだんだんに小さな分野へと4段階に分けられ、全体で5段階の下位分類がなされている。これらのカテゴリー分類は最大5桁の数字でコード化されていて、第1の桁は体・用・相・その他の別に用いられ、実質的な意味のコードは二桁目からということになる。二桁目以下のコードは、それぞれの意味にしたがって体・用・相・その他のあいだで相対応するように考えられているが、桁が下がるにしたがってその対応は崩れてくる。

この分け方は、日本語については一応理にかなっているが、他の3言語に関しては具合の悪いところが少なくない。たとえば、「漢語+スル」のサ変動詞は漢語語幹で切られ「体」として分類される。したがって、外国語のほうで動詞であっても語釈で漢語サ変があてられていると「体」すなわち、名詞という大分類のなかにいれることになってしまう。同じように、形容詞あるいは副詞の語釈が「漢語+シタ」とか「漢語+シテ」のような形であたえられていると、これらも「体」のところに置くことになる。したがって、体・用・相・その他という品詞分類を指向したカテゴリー分けは、外国語を考慮にいたれた分類ではあまり適当ではないということになる。すなわち、実質的な意味分類である二桁目以下のコードによる分類が考察の対象となるというわけである。

そこで、本表では、体・用・相の別は無視し、二桁目と三桁目の2桁ですべての意味分野をまとめて示した。四桁目以下は、意味が細分化しすぎ全体が見えなくなるおそれがあることや、体・用・相で対応のずれが大きくなってしまふことなどからすべてまとめてしまふこととした。したがって、表に示した意味分野の2桁のコードの第1桁は、1から5までの5分類で、それぞれ、『分

各言語項目数	日 本 語	ド イ ツ 語	フ ラ ン ス 語	ス ペ イ ン 語
意 味 分 野	項 目 数 (パーミル)	項 目 数 (パーミル)	項 目 数 (パーミル)	項 目 数 (パーミル)
抽象的關係				
10 こ そ あ ど	98(14.4)	171(17.6)	168(13.7)	294(16.9)
11 異 同・関 係	183(26.8)	326(33.5)	348(28.3)	578(33.3)
12 出 現・存 在	141(20.7)	232(23.8)	257(20.9)	450(25.9)
13 様 相・性 質	193(28.3)	242(24.8)	323(26.3)	535(30.8)
14 力	38(5.6)	46(4.7)	67(5.5)	141(8.1)
15 動き・変化・変形	652(95.6)	1150(118.0)	1254(102.1)	2027(116.7)
16 時 間	376(55.2)	427(43.8)	378(30.8)	552(30.0)
17 空 間・場 所	174(25.5)	320(32.8)	333(27.1)	457(26.3)
18 形	83(12.2)	120(12.3)	203(16.5)	233(13.4)
19 量・単位・程度	432(63.4)	427(43.8)	586(47.7)	841(48.4)
小 計	2370(347.6)	3461(355.2)	3917(319.0)	6108(351.5)
人間活動の主体				
20 自 他	77(11.3)	92(9.4)	125(10.2)	211(12.1)
21 家 族	60(8.8)	58(6.0)	94(7.7)	90(5.2)
22 相手・仲間・主客	18(2.6)	32(3.3)	37(3.0)	52(3.0)
23 人種・民族・階級	58(8.5)	135(13.9)	231(18.8)	311(17.9)
24 成員・職・地位	125(18.3)	182(18.7)	416(33.9)	354(20.4)
25 国・都市・地名	87(12.8)	102(10.5)	144(11.7)	204(11.7)
26 事 務 所・店	78(11.4)	123(12.6)	135(11.0)	164(9.4)
27 機 関・機 構	38(5.6)	27(2.8)	73(5.9)	102(5.9)
28 団 体	16(2.4)	23(2.4)	36(2.9)	64(3.7)
小 計	557(81.7)	774(79.4)	1291(105.1)	1552(89.3)
精神および行為				
30 感情・思考・論理	755(110.7)	1386(142.2)	1614(131.4)	2445(140.7)
31 言 語	337(49.4)	525(53.9)	669(54.5)	890(51.2)
32 創 作・芸 術	72(10.6)	85(8.7)	140(11.4)	175(10.1)
33 生活・遊び・動作	290(42.5)	349(35.8)	435(35.4)	635(36.5)
34 身上・行為・活動	176(25.8)	265(27.2)	311(25.3)	556(32.0)
35 交わり・争い	159(23.3)	272(27.9)	321(26.1)	494(28.4)
36 支配・人事・待遇	174(25.5)	288(29.6)	444(36.2)	651(37.5)
37 所有・経済・取引	204(29.9)	305(31.3)	361(29.4)	605(34.8)
38 仕 事・産 業	184(27.0)	235(24.1)	383(31.2)	497(28.6)
小 計	2351(344.8)	3710(380.7)	4678(380.9)	6958(400.4)

各言語項目数	日 本 語	ド イ ツ 語	フランス語	スペイン語
意 味 分 野	項 目 数 (パーミル)	項 目 数 (パーミル)	項 目 数 (パーミル)	項 目 数 (パーミル)
生産物および用具				
40 物 品・貨 幣	30(4.4)	44(4.5)	75(6.1)	100(5.8)
41 資 材	70(10.3)	120(12.3)	162(13.2)	173(10.0)
42 衣 料	79(11.6)	98(10.1)	137(11.2)	116(6.7)
43 食 料・薬 品	76(11.2)	83(8.5)	109(8.9)	92(5.3)
44 住 居	98(14.4)	121(12.4)	197(16.0)	227(13.1)
45 道 具	150(22.0)	186(19.1)	236(19.2)	266(15.3)
46 器 具・機 械	73(10.7)	90(9.2)	138(11.2)	123(7.1)
47 土地・道足・施設	42(6.2)	55(5.6)	88(7.2)	91(5.2)
小 計	618(90.6)	797(81.8)	1142(93.0)	1188(68.4)
自然物及び自然現象				
50 光・色・音・におい	134(19.7)	173(17.8)	272(22.2)	338(19.5)
51 自然・物体・物質	177(26.0)	207(21.2)	257(20.9)	323(18.6)
52 天 地	88(12.9)	75(7.7)	118(9.6)	153(8.8)
55 生 物・植 物	90(13.2)	86(8.8)	96(7.8)	122(7.0)
56 動 物・魚・虫	62(9.1)	61(6.3)	59(4.8)	77(4.4)
57 体	108(15.8)	110(11.3)	156(12.7)	175(10.1)
58 生死・健康・病気	105(15.4)	137(14.1)	197(16.0)	253(14.6)
小 計	764(112.1)	849(87.1)	1155(94.1)	1411(82.9)
そ の 他 1	158(23.2)	103(10.6)	60(4.9)	107(6.2)
そ の 他 2	0(0.0)	50(5.1)	37(3.0)	63(3.6)
延 べ 総 数 計	6818(1000.0)	9744(1000.0)	12280(1000.0)	17377(1000.0)
異 な り 数	6098	5494	5430	5338

類語彙表』の分類カテゴリーに対応している。すなわち、1：抽象的關係、2：人間活動の主体、3：人間活動—精神および行為、4：生産物および用具、5：自然物および自然現象に相当する。1、3、5については、体・用・相のそれぞれ対応するものをふくみ、2、4は体のみである。第2桁は、『分類語彙表』ではとくに見出しはついていないが、本表では、便宜的に見出しを付して示した。「その他1」は、『分類語彙表』の「その他」に含まれるもので、接続語や間投詞など実質の意味をもたない項目である。「その他2」としたものは、独仏西の方であってどうにも分類のしようのないもの、表記の違いで空見出しで

示されているものなどである。

表には、2種類の数字が掲げている。一つは、それぞれの意味分野に配列されている語彙項目の数字で、括弧の中には、延べ総数に対するそれぞれの項目数の割合を千分率で示した。小数点以下の数値を何桁まで示すべきかについては深い検討はしていない。単に、それぞれの言語の1項目のもつ全体に対する割合が0.06から0.15パーミルであるということから下1桁までとした。

この表をみわたして第一にうける印象は、4言語とも全体的には似ているということではないだろうか。「非常に」か「かなり」かはなかなか難しいところであるが、ずいぶん違っているという印象はないといえよう。『分類語彙表』の意味分類体系は絶対のものではもちろんないが、それぞれの意味分野について、ある言語が大事とかがえて多くの語彙項目を配していれば、他の言語も同じように多くの項目をえらんでいるということである。そのような全体的な視野のなかでそれぞれの意味分野をみみると、細部にわたっては少しずつ分布の違いがみられ、その違いがその意味分野にたいする言語ごとの関心の違い、Weltanschauungの違いを表わしていると考えるのであろう。

大分類のそれぞれの小計をみると、[抽象的關係]と[精神活動および行為]の分野に高い割合がふりむけられている。この2分野で全体の7割から7割5分くらいを占めていて、その重要さを明らかに示している。この二つの分野は意味的に大事であると考えられるわけであるが、同時に、この2分野には動詞(用)と形容詞・副詞(相)とをあわせてふくめていることも考慮しなければならない。

[抽象的關係]全体では、日、独、西がほぼ同じ値であるのにたいし仏の値がやや低い。下位の分野をみると、15[動き・変化・変形]の分野で日本語の値が低くドイツ語、スペイン語で高くなっている点に注目される。ドイツ語に関して印象的にいえば、この分野には動詞ないしは動詞から派生した名詞形が多く配せられていて、それらのうちの相当の部分がいわゆる分離動詞であり、「(方向・様態を表わす)前綴り+動詞本体」というかたちでそれぞれ別個の項目としてとりあげられているのにたいして、日本語の場合は、動詞の動きや変化の方向、様態が複合動詞の後ろ部分で示されることが多く、語彙的単位として分離され、複合したかたちでは立項されにくいということがこのような分布の違いの背景にあるようにおもわれる。16[時間]では日本語がかなり高く逆に仏、西で低い点が目につく。日本語の「今月」「今晚」「先月」「明後日」「来週」「来年」といった表現が1語で示される点がやや特徴的であろうか。

19 [量・単位・程度] でも日本語の高い値がややめだつ。助数詞がここに含まれていることが大きく作用していると考えられる。「ひとつ、ふたつ……」もわずかながらこの分野の特徴となっていよう。

[精神および行為] の全体をみると、独、仏、西で値が高く、日本語の値がやや低い。それぞれの分野をみると、30 [感情・思考・論理] では日本語はかなり低く、他の3言語では高い値を示している。感情、思考、論理を一つの枠のなかにいれて考えることは適切でないかもしれないが、一応原則にしたがってこのようにした。35 [交わり・争い] 36 [支配・人事・待遇] の分野でも日本語の値はやや低い。これにたいして、33 [生活・遊び・動作] では日本語の値がかなり高い。いちいちの語についてあげることはしないが、たとえば、「公害」「仕合せ」「豊作」「出勤」「朝寝坊」「家出」「弁当」等々、勤労・生活・衣食住・スポーツなどの分野に日本語独特のものが分布しているようである。

大分類の残りの3分野は、それぞれ1割弱の割合を占めるにとどまっている。[人間活動の主体] 全体では、フランス語がやや突出していてドイツ語が逆に少ない。このうち、大きな差のみられる分野は23 [人種・民族・階級] と24 [成員・職・地位] の二つであろう。23では、仏、西が多く、日本語ではナニナニ人というかたちの人種名、民族名をあまりとりあげていないのに対して、他の言語ではかなり多くとりあげられていること、さらに、たとえば、bourgeois (中産階級の人) rebelle (反逆者) Sieger (勝利者) Tourist (観光旅行者) といった「～する人」という形態的な派生による造語法でつくられた語が多くとられていることによるものと考えられる。これらの語形の日本語の対応形は、日本語の語彙的单位としては複合的であり独立した語彙項目としては立項されないためこのような差となつてあらわれたものということができよう。24でも、Künstler (芸術家) Akademiker (大学教育をうけた者) impressionnist (印象派の画家) financiero (財務官) のように職、地位にある人をあらわす仏語、独語、西語が数多く採用されているが、これらの多くは派生語であり、語構成の上で日本語と異なっている点では23の場合と同様である。この分野では、フランス語が職業、地位にある人を表す語形を数多くあげていることは注目してよい。

[生産物および用具] では、西がやや少ないことをのぞいて、全体としてはどの分野もよく似た分布を示しているといつてよい。[自然物および自然現象] では、全体として日本語がわずかに多いといえようか。51 [自然・物体・物

質], 55 [生物・植物], 57 [体] で他より多く分布していることが認められる。51では、日本語に「なだれ」「噴火」「大雨」「小雨」「つゆ」「ふぶき」「夕立」「雨天」「快晴」「晴れ」「くもり」「夕焼け」といった日常的な自然に関する語が多くとられているのが特徴的ということができよう。日本語の「暑さ」にたいしては、Hitze, chaleur, calor と3言語とも対応項目がそろっているのに、日本語には対になってそろっている「寒さ」にたいしては、3言語とも対応項目をもたないのもおもしろい現象といえよう。55では、草木、野菜、果物、などにさまざまな違いがみられる。56の動物、虫なども日本語のほうにやや独自の者が選ばれているとみることができよう。57については、物としての体の部分にかんする名称というよりは、「からだつき」「人体」「全身」「身(み)」「笑顔」「脇」「片手」「右手」「両足」「両手」といったやや抽象されたともいべき項目があげられている点に注目したい。

以上、それぞれの意味分野ごとの分布をみてきた。こまかな個々の語彙項目のありなしを一つ一つみていくことはそれぞれ興味のあることであるが、何千という項目についてそれをすることは实际的ではない。ここでは、おおよその分布のようすを概観するにとどめざるをえない。それぞれの分野についての詳細な考察は更なる機会を待つこととしたい。

注

- (1) 国立国語研究所報告88として刊行された本書は、筆者が前任地の国立国語研究所において担当したものであるが、第1次資料的な性格が強く、その作成の意図、そこからえられるなにがしかの知見等をおおやけにする義務があると常々責任を感じている。本稿は、そのような義務を果たす仕事の一つでもある。本書には、神ならぬ身の行なったこととて、データにいささかのミスがみられる。本稿では、国立国語研究所の好意により、コンピュータファイルとして蓄えられている元データを借り受け、修正をくわえたものを用いて分析を行なった。それでもなお、誤りがないとはいえず、また日本語にかんしては、国立国語研究所(1984)で示された基本語彙約6000の個々の語の扱いと表記の扱い等で必ずしも同じでない部分もあり、計量した項目数が必ずしも一致していない。本稿でしめた数値は絶対ではなく、つぎの機会には再度修正をくわえることがありうるものである。

引用文献

- イエールムスレウ (1985)『言語理論の示立をめぐる』竹内孝次訳(岩波書店)。原著は Louis Hjelmslev (1943) "Omkring Sprogteoriens Grundlæggelse". F. J. Whitefield の英語訳 "Prolegomena to a Theory of Language" (1953, 改訂版1961) はつとにしられている。

- 国立国語研究所 (1964)『分類語彙表』国立国語研究所資料集 6 (秀英出版)
- 同 (1984)『日本語教育のための基本語彙調査』国立国語研究所報告78
(秀英出版)
- 同 (1986)『日独仏西基本語彙対照表』国立国語研究所報告88
(秀英出版)
- 石綿敏雄・高田 誠 (1990)『対照言語学』(桜楓社)